**2018 年 5 月 9 日放送**

# 頻用処方解説　加味帰脾湯①


## 東京女子医科大学東洋医学研究所　**森永　明倫**


加味帰脾湯と、その関連処方として帰脾湯についてご紹介致します。１回目は効能、出典、生薬解説、古医書における記載、処方適用のポイントを紹介致します。

### 主な効能

まず帰脾湯の主な効能です。医療用漢方エキス製剤の添付文書には、虚弱体質で血色の悪い人の貧血、不眠症と記載されています。加味帰脾湯はこれに加え、精神不安、神経症と記載されています。なお、一般用は体力中等度以下で、心身が疲れ、血色が悪く、ときに熱感を伴うものの貧血、不眠症、精神不安、神経症と記載されたものもあります。

### 出典・処方名の由来

加味帰脾湯は、帰脾湯に加味した処方です。帰脾湯と加味帰脾湯の出典は宋の時代の『済生方』、明の時代の『玉機微義』『薛氏医案』とされています。『済生方』の帰脾湯には当帰、遠志が入っておらず、『玉機微義』で当帰が加味され、『薛氏医案』でさらに遠志も加味されて、現在の帰脾湯となりました。加味帰脾湯は『薛氏医案』に帰脾湯加柴胡・山梔子、帰脾湯加柴胡・牡丹皮・山梔子、帰脾湯加牡丹皮・山梔子の 3 種類が記載されており、現在の加味帰脾湯は主に柴胡と山梔子を加えたものとなっています。帰脾湯の処方名の由来は、「脾の正気が脱したものを元に帰す」という意味からと言われています。

『薛氏医案』のうち、『内科摘要』には「帰脾湯治思慮傷脾不能摂血致血妄行或健忘怔忡驚悸盗汗或心脾作痛嗜臥少食大便不調或肢体重痛月経不調赤白帯下或思慮傷脾而患瘧痢（帰脾湯 思慮脾ヲ傷リ，血ヲ摂スルコト能ハズシテ血妄リニ行クコトヲ致シ，或ハ健忘怔忡，驚悸盗汗シ，或ハ心脾痛ミヲ作シ，嗜臥シテ食少ナク，大便調ハズ，或ハ肢体重ク痛

ミ月経調ハズ，　赤白ノ帯下アリ，或ハ思慮脾ヲ傷リテ瘧痢ヲ患フヲ治ス)」とあり、続いて「加味帰脾湯即前方加柴胡山梔（加味帰脾湯即チ前方ニ柴胡、山梔ヲ加フ)」とあります。

**生薬構成(漢方的薬能)**

医療用漢方エキス製剤の中では十全大補湯、人参養栄湯、帰脾湯、加味帰脾湯が気血双補剤に分類され、いずれも気を補う四君子湯と血を補う四物湯の合方である八珍湯の加減方になります。

まず、帰脾湯ですが、人参、白朮、茯苓、黄耆、当帰、竜眼肉、遠志、酸棗仁、木香、甘草、生姜、大棗の 12 味から構成されます。これに柴胡、山梔子が加味されたものが一般的ですが、牡丹皮も加味しているエキス製剤もあります。帰脾湯の証にやや熱状が加わったものに用います。

人参、黄耆、白朮、茯苓、大棗、甘草の６味は脾を強くし、すなわち健胃強壮作用を持ち、竜眼肉、遠志、酸棗仁は心を養い、神経を強め、かつ鎮静し、木香は気分をさわやかにし、当帰は血を補います。柴胡、山梔子を加えて清熱、解鬱し、自律神経の興奮による熱を鎮める作用が強まります。

**古医書における記載（江戸・明治・大正）**

『勿誤薬室方函口訣』（浅田宗伯著：1815-1894）には、「此の方は『明医雑著』に拠りて遠志、当帰を加へ用ひて、健忘の外、思慮過度して心脾二臓を傷り、血を摂することならず、或は吐血、衄血、或は下血等の症を治するなり。此の方に柴胡、山梔を加へたるは『内科摘要』の方なり。前症に虚熱を挟み、或は肝火を帯ぶる者に用ゆ。」と書かれており、加味帰脾湯は帰脾湯の証に虚熱あるいは肝火を伴う者に用いるようです。

『梧竹楼方函口訣』（百々漢陰著：1774-1839）には、「婦人の虚労薬なり。真の骨蒸労には効かず。唯，血虚して寒熱往来し，夜分寝難く心気怔忡などする者，世に多くあり。此の湯宜し。とかく此の湯の熱は脾経の血虚よりくるものと心得てよし。一通りの骨蒸労熱にはあらざる也。」と記載されています。婦人の虚労の薬で結核などの消耗性疾患由来のものには効かず、不眠や恐れたり憂えたりなどの精神症状、動悸に有効であるということです。

また、20 歳代の男性で元来虚弱な体質で、ある朝早く起きて商売の帳尻を合わせたところ、取引を間違えてよほど損になっていることがわかり、ひどく心配した。すると急に顔色が悪くなり、胸の気持ちも悪くなって、その夜吐血した。それからは物事に驚きやすくなり、動悸がしたり、眠れなかったりするようになった。そこで帰脾湯に山梔子と柴胡を加えた加味帰脾湯を与えたところ、すっかりよくなったという症例を紹介しています。

**処方適用のポイント（矢数道明・大塚敬節）**

『臨床応用漢方処方解説』（矢数道明著：1905-2001）には、「元来胃腸の弱い虚弱体質の者が、身心過労の結果、種々の出血を起こして貧血をきたしたり、健忘症となったり、神経症状を起こしたりするときに用いる。」と記載されています。

『症候による漢方治療の実際』（大塚敬節著：1900-1980）にも同様に、「思慮が多きにす

ぎ、そのために脾を傷り、血をおさめることができないから、下血、吐血、衄血などの症を現し、または心が虚して怔忡（怔はおそれる。忡はうれうる）驚悸（おどろきやすくて動悸がする）健忘（物忘れがはげしい）などの状を現すものを治する。」とあります。老人でなくとも、虚弱な人を目標にしています。また軽い中風（脳卒中の後遺症）で、物忘れをし、言語のもつれるものに用いるとしています。

『椿庭先生夜話』（山田業広著：1808-1881）には、帰脾湯を投与して自殺した症例が提示されています。「ある婦人が癇症（これは今でいう神経症）を患い、治療を受けに来た。婦人は「癇症ですが、自分には帰脾湯を用いないでください。」といい、理由をきくと「自分の夫が癇症のために医者にかかった時に虚証と診断され、帰脾湯を投与されたら上逆発狂して自殺してしまった。」椿庭は信じていなかったが、後日別の婦人が癇症を患い、治療を受けに来た。虚証のようにみえたため、帰脾湯を投与したところたちまち発狂して井戸に入って死んでしまった。前の婦人の話が誤りでないことに感服した。

その後、ある男子が癇症で治療に来たが、虚証であったから帰脾湯を投与すると 1 年余りで全快した。「帰脾湯は症（証）が合えばその効果は神のごとくすばらしいが、一度誤るときは人を殺すこともすみやかである。よく虚実を判断して用いるべきである。」と注意しています。